

|     |
|-----|
| 442 |
| 十   |
| 三   |
| 22  |

雪映草子

十二





中記乃そちち

十二卷



大屋寺内

十一



あまみきり

大屋寺内

一

あまくられ池

大屋新町

二

たぐわのこくさ

婦系大堤

三

まれ日さし

安田

四

あつぱり

赤坂

五

まきやのやまき

三本柳

六

まきやのやまき

八幡

七

あまきくごや

静町

八

沼のあきり

上八町

九

あまべうづき

上堺

十



|         |       |    |
|---------|-------|----|
| ミはふれまゝ  | 三原    | 十二 |
| めどめ多きあゝ | 明永    | 十三 |
| いちれ多きみち | 見入野新田 | 十四 |
| くらしやま   | 杉澤    | 十五 |
| 望中れみどり  | 杉目    | 十六 |
| あふけぼろ   | 横手前郷  | 十七 |
| たのめみ杉   | 大澤    | 十八 |

大正拾五年三月拾八日



|   |      |
|---|------|
| 登 | 6517 |
| 函 | 442  |
| 番 | 11   |

○大屋寺内邑

○里長 ○堀江平藏

○大屋本大谷ニ其いふへ大宅のちきりいふなり此里  
正堀江といふ舊名家ゆへ大屋新町兩村の家七戸あり時より此  
家ゆへて草創なりといふなり新町を此方より別けしる邑と  
もいふ

○寺裡村 家今ナ  
五戸あり

○享保日記に寺内民家十三軒といふ寺内と多き名にいづれ  
寺ありとて村名を此地ある祝融山正傳寺あり此寺今と新  
所を遷せり

○初瀬、観音祠。祭日四月十七日。齋主。勘重郎

本國谷氏より五石の寄附ありし処なりとも國谷の知行処と



辨財天女祠

○祭日七月二十日

○齋主 庄兵衛

○後村 家今  
七戸

○享保郡邑記に民家六軒と有り今七戸に此後村を内郷とよみ

○寺村 家今  
五戸

○享保日記に家負六軒と見えりとも寺ありしより此名に

○長畑村 家  
八戸

○此長畑村々享保の世にも民家八軒今もまゝ八戸あるこ

○堀野内村 家  
九戸

○此邑むろー十軒とあり堀内まゝ寺中堀内おどいと多し古  
館古柵の有り地は此村名ありさうけき近き日野備中館あ  
まゝとす

○諏訪明神社

○祭日七月十七日

○齋主 堀江平藏

祭日本所射山の如く世日なりけりありて十七日を祭る古き社なりし

○熊野澤邑 家今  
九戸

○熊野澤村むろーハ民家七軒とあり今ハ戸村上ハ在る村にソハ  
一ハ此処ハ熊野ノ社ありてあるところの知事人かー今ハ大山咋  
神をいひまゐり

日吉社 山王  
堂

○祭日四月十七日

○齋主 長兵衛

○榎澤村 家今  
七戸

○享保日記に五軒と見え此澤々榎木多しよりいふ村よ  
りハいそく遠く隔より一処より馬鞍村を鄰村とせりといふ







草といふ処ありこゝ河童草傳をあらわすなりなり〜水俣  
みちみちをみちといふもいふなり

○大屋新所

○大屋新所

○大屋新所

大屋新所

○大屋新所

○大屋新所

○大屋新所

大屋新所

○大屋新所

○大屋新所

大屋新所

○大屋新所

○大屋新所

大屋新所



大屋新町村

里長

六右衛門

○大屋新町は驛路往復の三町東の方なり大谷寺裡の條も  
云ひが如く大屋の總名なり新町鬼嵐中里杉野下などれ  
枝郷ありまゝ寺々三ヶ寺なりき

○新町村

今家四  
十戸なり

○享保郡邑記に民家廿六軒と見えり小野寺の時世に町肆  
ありて賑ひに処ありむ大屋寺はしも十日市の字地なり

○杉野下村

今家  
二戸

○此邑新町の東南に在りむろゝ家三戸と見ゆ此杉野下と  
あり○大山祇神はありむろゝ神酒を名齋る 齋主佐次右門

○中里村

今家  
廿五戸



○中里、享保日記に民家廿二軒と見ゆ此村に新田山光徳寺と  
東本願寺の宗派ありとあり。その寺れとありの記を

鬼嵐村の家

○鬼嵐といふ所義少やと古老より其のむろ。日野備中  
殿在りける時城より通ふ山嵐烈しけり。此果お風を罵罵罵  
て鬼嵐といひつるが今もそのころといふおあがりし詠りや  
あれどお山風の轉りあり。むろ。紅葉おそろしき処ゆゑ城  
主めづ信ひといふ。時乃ゆゑ山風ぞさそふ日敷て時雨も露  
も深し木の葉など頼阿弥陀佛の詠りる歌の心や似たり日  
野備中某々小野寺の家主といれと定ふえあるはなは後  
考へ記さる。大正十三年

○山王神社日吉山大國寺。祭日九月十九日。別當。西學寺

○聖徳太子社此上宮太子ハそともあり。神像あり。新藤柳

田の村北往復西方の鎮座あり。法龍山祝融寺といふ舊

り。地ゆゑ縁起神寶等も傳へ。一郷の鎮守とて鬼

嵐といふもまろ。四月八日祭あり。別當。西學寺

○薬師如来社瑠璃山護王寺。祭日太子社同。別當並同

名をとり

○手枕沼此沼ハ斧鐺まき。高刀をこれせあの鐵輪を萬と云ひ

き。卷鉄をちまきといふ処なり。また手漣といふ此あり。いそも

な手枕といふ蛭蛸も。名あり。此沼ハ中嶋ありてそのめぐり

水は湛てその形あり。いそ。名あり。おへに



○あら沼 西南の山陰にあり、荒涼たる事おもはる、新沼と事ふ  
よれるとおもふ、ちた人の云、此沼水はすむ雑魚を骨のあらく  
しきことあり

○鴟鵂清水 往復西道の傍にあり、此寒泉なり、水無月  
の照りはくく、往来人の湯をとめ、喉をうるほし、よき清水  
あり、さうけき、此魚鷹に名いふやうである、さる鳥に巢る処に  
あつて、汝、鮎造る、石なりともあつた、此あつた田地の名を  
さうけき、鴟鵂の名をとりける

○江津の庭梅 おかど鬼嵐に江津彦右衛門の庭にあり、まき  
小大樹あり、此羽陸奥よりきたる、こから梅の木を、世に頼る  
や、はる花より重れ、古にきて、里民は浪連梅といふ

○阿倍氏 舊家に安部平右衛門といふ、此家から家  
古に鎗を藏り、ゆゑ、あべ後といふべし

田舎の池の名

- 千刈田 ○貝窪 ○石揚 ○さうひ田 ○中里前 ○三石がき
- 七石川 ○師澤 ○竹ちち ○大木下 ○大橋 ○竹原
- 小中野 ○狐森 ○太子堂前 ○小松原

修験両學寺由來

○吉祥山兩學寺の鼻祖は陸奥國膽澤郡水澤の士俗姓酒  
左近某とて、英雄の武士として、浮浪の身となり、出家して、薙髮  
衣をき、やうし諸國修行の心けり、永禄三年庚申、春國を退き、  
其國より寺久保の兵衛一流を極め、其傳法の一巻、今にあり、かくて



出羽国平鹿郡大谷郷にありしころ小野寺に城主日野備中某  
殿の歸依よりて此處に居住て山王宮に宮林寄附ありて其處に  
ち此別當職に命じられ累世連綿として住ぬ名を快水といふ  
小野寺家落城しつゝ日野家も亡落しその跡を山館と  
まじりて當寺といふ今も寺に遺るぬ當寺の門に欄額に古樹の  
門に株貫を懸挂せし作り丸の内橋の家紋ありしを近き世  
の木匠があらぬころもあり削り落しころといふ

○開祖快永法印 ○二世永榮 ○三世永易 ○四世永義良 ○

五世永勇 ○六世永山 ○七世永順 ○八世永峯 當代天明年中中御あり  
即本田高指石指領致し中

九世永林 朱印  
戴せし ○十世永鍔 當代寶永年中新田高五指領し朱印及戴當  
寺先年莊齋担任せし寺あり中中絶せしを寛

政三年額上よりありし處  
古來れより傳へるなり ○十一世現住永隆代二

### ○西學寺家藏如左

法華經壽量品一卷。卷末に。明應八己三月廿日平半右衛門  
尉重俊持行之と見えまゝ此經の裡の方か別人の手にて武藏  
國住人平半右衛門重俊

○右小野寺上野寺先祖。本國記に見えりといふ

○三尊の釋无尼佛十六阿羅漢三幅對城齋の時れ掛物のよし  
といふ古畫に繪師誰人といふ事をあらわしきまゝの妙絶な事  
目をおどろかしぬ明兆の画といふれど金泥をちりばめし処あるべ  
き山の画めさる事ありとありといふ此画の裏に筆をあらわし  
あれど磨滅して得ふみとありしころよりけきど草書に玄と書し  
やうあれし玄澤ありむと玄澤は。大和國菩提山の僧明應のころ



此人ありむと云り

○一遍上人熊野權現縁起一卷時代紙のあつたをあると  
おもわれり是は横手華嚴院より同一巻なりそれぞ原本  
ありしか此寺に寶物ありまゝあり

○堀江治兵衛家譜

○清和源氏の末流として堀江光義第五代○下野守義胤

○大炊助義定○金吾義則景信母深草出之○義氏頼氏

○義純法樂寺殿○足利判官義昌成義景亮○岩次郎義範

○帶刀先生義賢○堀江堪四郎源實中將子

○慶永元年甲子正月吉日

○義景印

此治兵衛家の先祖に遺物として年久しく認めらるる此

正月にちみ見しとありけれなりと云り

○正傳寺世代

○祝融山正傳寺ハ曹洞宗こそち此寺の寺跡山跡ハ一  
鎮守聖徳太子を神と齋奉りしなり天台真言あとの僧侶住  
つる寺のありありそを今も世にありて役氏の別當寺ハ  
号あり寺号も法龍山祝融寺と名をふりてありめす此  
寺も平僧の位一頃ハ大谷寺にありて觀音寺といふなり  
明暦萬治れころあつての記録のそを傳きり慶安元年の中駿塚  
多々元禄の年ころあつての記録のそを傳きり慶安元年の中駿塚  
も東西六間南北四十二間四尺四寸隙地とありぬす骨外秀存和  
尚の代ハ法外の事なり追院の罪をありしゆと骨外秀存世代



を省ぬ廃寺とありしを再興して祝融山正傳寺とす

○當時開山海藏寺三世當り大州梵宇和尚を勸請大永五年

龍興

○二世通庵英徹和尚享祿五年己丑八月廿日遷化此三世の骨外和尚の事とさるるあり

○三世清山本雪和尚天和三年十一月六日遷化○四世別山本徹和尚貞享三年三月三日遷化

○五世湖山用春和尚元禄三年十月六日遷化○六世機安高全和尚寶永四年八月朔日遷化

○七世日岑大映和尚享保四年七月六日遷化○八世大空敬龍泉和尚寶曆元年十月廿九日遷化

○九世日舜義光和尚寶延三年八月廿三日遷化○十世野一箭智舜和尚寶政八年六月三日遷化

○十一世天岩運長和尚寶政九年九月廿六日遷化○十二世徳翁密鄰和尚文化五年十月九日遷化

○十三世大雄萬因和尚文化三年四月七日遷化○十四世大連亮禪和尚文化九年十月八日遷化

○十五世禪宗玄高和尚嘉永元年十月廿日遷化○十六世現住禪教機徹和尚代々

右 十六世 正傳寺

○光德寺

一向宗

○大谷村新田光德寺、東本願寺の直末、新田光德寺といふ

新田山といふ如く、開創を釋圓祐之圓祐俗姓、新田次郎右衛

門尉興徳と号す、新田義貞三男、義宗二男、新田次郎右衛

門義齊始て陸奥國和賀郡黒澤尻村に住居、義齊嫡

男元齊俗名代々相模國より住り、元齊嫡男新田源三郎

正興同処に住居、正興次男新田次郎右衛門尉興徳、則ち圓

祐之ちり、文正・應仁の世、五畿七道大亂、一族のり



らかりば足利家の為に滅亡せしと鑑定て嫡子藤左衛門尉と共々難  
鬚深衣の袈衣ありて本山八世蓮如上人の中弟子となりて興徳の法  
号を國祐と給りまゝ藤左衛門正采の實名最淨土真宗の法意  
は適ふ名ありとて正采の諱を以て正采と呼ぶ給りしこかくも本山  
九世實如上人は仕へ奉りぬ國祐よりびにちれくふくも弘法の  
ため多岐あり國縁をもめり黒澤尻より先祖傳來の名  
號を本尊として一字を草創て自給諱の二字を附て寺號を  
興徳寺とし文龜三年癸亥二月十七日壽九十歳よりて其地を遷  
化法号實如上人の貞筆に

法名  
釋國祐

文龜三年二月十七日 釋實如上 市花押

○二祖正采 國祐嫡男俗名藤左衛門  
大永六年三月廿六日 當代實如上人より大幅の一軸阿弥陀佛  
の画像を拜領て黒澤尻より向寺務相續せり画像の市裡書は別  
實如上人五十八歳の貞筆にその市裏書なり如し

大谷本願寺 釋實如上 市花押

○方便法身尊像 永正十二乙亥七月廿八日書之

奥州和賀郡  
久留澤尻 新田光徳寺 願主釋正采

此画像は只今所持せしところの國祐創の寺名兼興徳の二字をより  
寺号とせしと實如上人興字を光字より改て給りしこかくて  
永正十六年みちれく飢饉より黒澤尻を出て出羽國此寺に  
郡馬合名邑の上臺より移り住て大永六年丙戌三月十九日馬  
合名の上臺より遷化て正采嫡男次郎右衛門 後小徳五郎と改めし市  
右門と云々家より断絶



○三世淨専 正保二年二月文源元年壬辰八月廿日代

當代本山十世證如上人より小呂阿弥陀の画像頂戴申理書ハ則證  
如上人の真翰之内佛々今安置一奉る大谷城主小野寺家の家連日  
野備中守某の皈依之依て永禄年中馬倉村より大谷邑に遷りぬ  
今此光徳寺是二日野備中守後胤今同郡南河川ノ谷士日野治石  
衛門某同苗小左門某高山孫左門某等則當寺檀越の家ニ  
尤鎮守ハ江朝處寺も當寺に在る

○四世淨慶 淨専二男宮内卿ト  
号長六十三日代 永禄の後小野寺家と最上勢と對陣の

と紀出陣 世俗ノ淨説  
カモ傳カテ 勲功ありて小野寺氏より刀一腰田 當村内  
千和田ニ 畑耜

乃因本  
領屋敷 山 當村内  
佛ヶ澤 等寄所ありし父の當村ノ大隅 雅樂之介先祖大  
谷セウおウ能肝與 此田畠

より至るまで押領せしる雅樂之介数度の火災ありぬ是が祖

由諸ある地を押領したる罪を乞ふと恐る寛永年中佛ヶ澤代内

一ヶ處 證地 を當寺より寄附す

○五世真檐 淨慶嫡男二弟  
寛元年正月三日代 本山第十一世所門主教如上人東西分流

のと紀仙北三部叔初飯参

○六世淨徳 淨慶三男真檐実弟ニ  
寛永三年十月九日代 ○七世永玄 淨慶四男真檐実弟ニ  
寛永九年十月十日代

○八世采顯 真檐三男二弟  
寛永三年五月廿三日代

此代本山十三世所門主宣如上人より蓮如上人の真影を免さるゝの  
画像の内理書ハ則所門主宣如上人の内理筆ニ

○本願寺釋宣如 内花押

○蓮如上人真影 寛永十五年寅寅初秋廿三日書ニ  
出羽国宇都郡横手大屋村新田光徳寺願主釋采顯

○九世淨玄 采顯嫡男官文  
寛永三年四月十六日代 ○本山十四世琢如上人より本佛尊を免さ



る即門主真筆の證あり

○木佛尊像

釋琢如市花押  
萬治三年庚子賜冰節

羽州平瀨郡仙北横手大屋村新田光徳寺  
領主 釋 淳玄

○十世祐心

衆議二男淨玄其弟  
寛永元年甲申正月廿日

○本山十五世常如上人より開山聖人の真

影を免さる理書即門主真筆の

○本願寺釋常如市花押

○親鸞聖人の影

延寶四年丙辰夏五月中旬書之

羽州大谷村新田光徳寺  
領主 釋祐心

○十一世了空

徳仁廟男延享  
四十四年八月廿日

○本山十六世一如上人より元禄七年甲戌太子七高僧の影免さる理書則

一如上人の真筆寶永元年飛騨出仕免さる其外一宗の定或佛像

繪讃洪鐘等悉周備之正徳六年五月廿日参内權律師勅許論

旨頂戴せり

○十二世義琳

了空廟男天明  
四年甲辰四月廿日

元文五申年佐竹淡路殿より五十五石寄附高あり此高後より禄高  
減少節市割合を以引上り成ぬ。右殘高明和五年中又候市指上  
高より相成其節市屋敷へ無殘返上右高五名永代寄附より置  
唯今所務高五石二

○延享四年丁卯八月權律師

勅

許宣旨頂戴長橋へ参内禁中

仙洞市所。女院市所直獻上。攝關傳奏上卿。辨官職事何

獻上

○寛延元年辰六月。從如市門主思召を以て取立余間市一家昇

進輪袈裟衣免さる並真如上人、真影を給ふ此理書、則從如上人

ノ真筆同二年己八月本山中殿失火より同上京市の證之獻上一種

銀一則於白書院市對顔平座市褥市着座市言有之奏有時



市用人苗村民部

寶曆三年歲市門主兼如上人内陣出仕免了多並銀子廿枚并領  
右八寶延年中改沁寺之儀兼蒙仰落着之為市懷義市取  
其市事

○同年春改沁寺之儀市内之蒙仰上京本山表市順豆相磨  
為市懷義同年土月高廿石并領三寸為扶助料玄米三十石  
波下置祿寺被召立未八月市朱印頂戴

○同年土月為市国用市領内東一沁觸頭被仰付其市事

○明治二年市君様市入存六月廿五日市目見被仰付於市城金市市  
戴獻上十帖一本

○當寺八仙北三部東一沁寺号建立之始

○十三世宗荃 六卿長明寺淨智恵二文化  
二年乙丑十二月十六日代

安永五年申土月三寺古市繪替市領主様市懸望之從本山右  
市繪替市進達被為有之類年来市取扱市雙方様市順豆  
被相濟其為市賞義金子拾兩并領被仰付其市事

安永七年十月三寺村地面并借被仰付其市事

寶曆年中頂戴市朱印市引上寶政七年卯土月市黑印頂戴  
此市判紙寫

貳拾石 六ッ成

内拾三石

外七石

光德寺

市廣部大屋新所打之市

同部外之目付之市

寶政七卯年土月十五日

市黑印

十四世現住義我亮 宗荃嫡男母  
義琳嫡女ナリ

此代寶政十二卯年本堂再興造



作悉皆周備々 文化三年亥七月九日入院巾桶濟

本山二十世榮如上人、其影免るる巾裡書則巾門主真筆二

文政二卯年庫裡造宮悉皆備、弟二世正策ノ三男淨祐を以て  
當時<sup>寺</sup>の別院越中国新川郡新所光徳寺開基と云淨祐後々淨園  
と更名を今以て連綿本末式無滞

### 傳來ノ寶物

土面觀世音一軀 行基僧正所作

俗姓字 本尊ニ

色紙

詩歌 七枚 尊應親王而真翰

備前長則行刀一腰

今上皇帝巾衣翰一幅

大佛宮巾真

筆一軸 此一軸ハ伯父儀祐錦織寺巾門主  
常慈上人ヨリ拝領ス皇當寺ニ奉カ

善通寺大師半金色巾影一軸

圓光大師巾真筆

琴高仙人画 山田通安筆

百人一首上下二冊

堂上方巾筆巾名不詳

天樹院名巾筆一行書 寶政十年戊午

春小野寺主永を以て巾取次として傳來の人麿の木像を献上と記

君あり拝領の書といひ此人麿の神像を頓阿弥陀佛の自作と

以考ふ頓阿法師神は祈願して三輪山の神杉を乞ひむとめて

百鉢の人麿の神形をうつし作り一軀は和歌一首づ、月雪花

此詠歌百首ありといひ其百鉢の人麿のふかき世をもちく

なりといひその一種なり

魚ノ額 天樹君北巾真翰 所田大之進巾取次を以て額安

養良界ノ三字横物拝領 文化十年酉秋此三字額巾引上ケ同十一

年戌正月魚ノ二字巾書替拝領 黄金色の文字を彫刻し

地を紺青を彩て今本堂より献奉し

経藏の額

鳳譚之筆ニ



口宜案

上卿山中納言

正德六年五月廿日

宣旨

藏人權右中辨兼左衛門權佐藤敬孝奉

勅件人宜任權律師者

權右中辨藤原朝臣敬孝傳宣

權中納言藤原朝臣兼親宣奉

勅件人宜任權律師者

正德六年五月廿日

修理大寺大僧官殿顯左大史小槻禰

奉

口宜案

上卿左兵衛督

延享四年八月十二日

宣旨

義琳

宜任權律師

藏人右中辨藤資興奉

美我琳

左中辨藤原朝臣資興傳宣

權中納言藤原朝臣顯道宣奉



勅件人宜任權律師者

延享四年八月三日修理大寺大佛官殿瀨左大史等博末槻禰

奉

前大寺中經緯實典奉

延享四年八月三日

宣旨

上卿大史等

五部六司等官修理大寺大佛官殿瀨左大史等博末槻禰

奉

大屋邑中古ハ大谷といひ  
ハ大宅ともいひつる  
ハ此大屋新所村の山岨ハ  
大山祖神社ハ此神の所前ハ  
雲の一本ト連理あり  
桐の一本ト連理あり  
赤松ありてさうりあり  
本連理なり  
とて人々ト連理本ト

いふ

此年嘉那少

又ハ本連理ハ

上吉田村ト

福澤邑ハ

梨の本の連理

この所

梨生大明神

と唱へて年数天女

初め

同郡増田御古鑑の

南ハ杉の連理

此本連理ハ山縣山人等ハ鳥居本

山神の鳥居トてりこみ手馴せり

弘仁のむろり右京人弓削宿禰ら唐

歌本連理ト日本後紀十卷其外古書ハ又えり





大屋郷大梅樹

此梅の本鬼ヶ十戸村の

甲辰年乙卯の庭に在る

木の高三丈四五尺

東西十二間南北三

丈間枝むらう

周囲一丈五尺

花ハうも紅ふて

満開の時々白

其實小くして

凡三四斛とむきふ

りつ

新町村

西の方

ここ





多枕の池

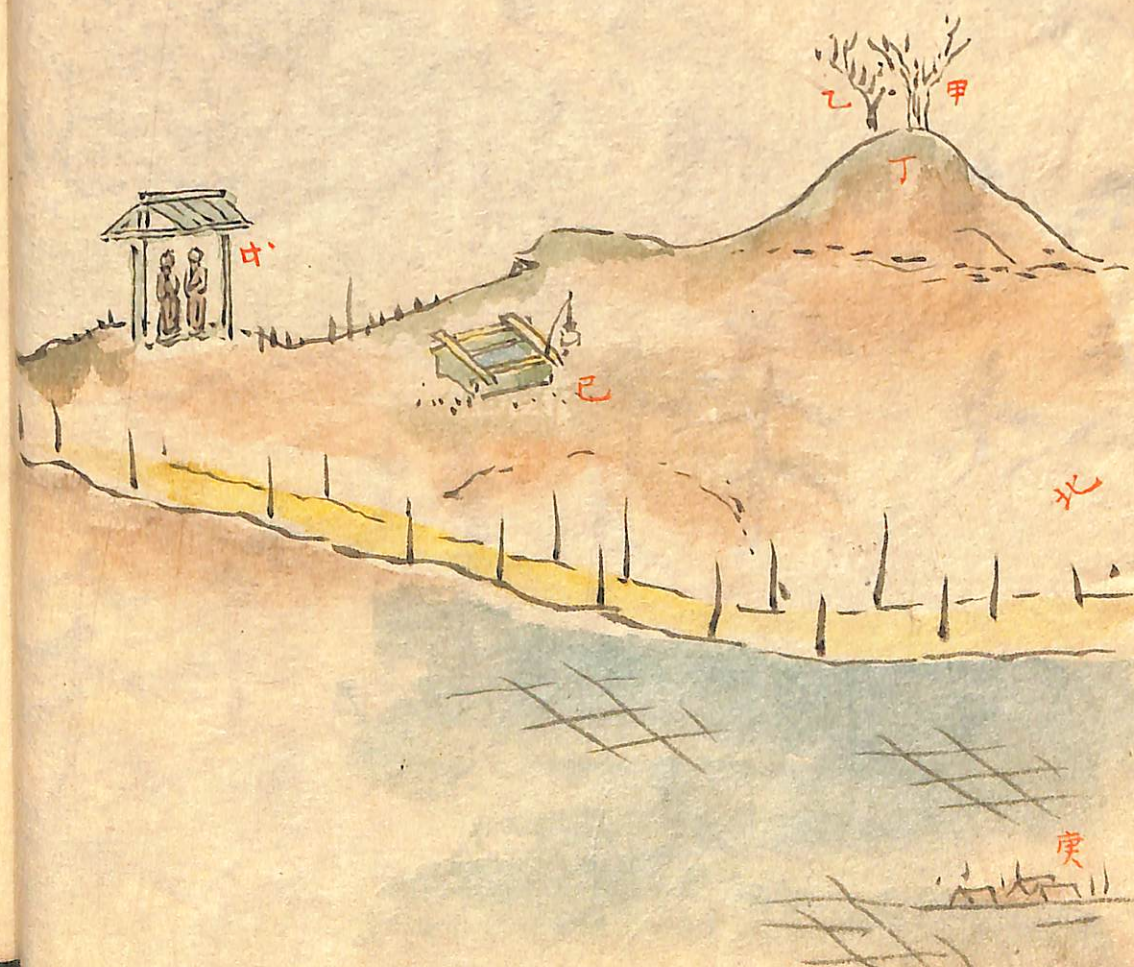
多枕の池もいふ池に甲  
 池渡の街路西大尾村の路ふ  
 いと通丁太子山の北  
 杉森山の東ふ中うて  
 あつ多枕といふあつう  
 斧鉋をとのせあつ  
 鉄輪で手纏う  
 云いまゝその形せいで  
 大町と蛭川で  
 多枕といふとよ  
 池水のさへも  
 そふふ似てんハ  
 ちいさな行も  
 記し





鳴鳩寒泉

汝還の道は傍<sup>甲</sup>皂角子<sup>乙</sup>李<sup>丙</sup>の<sup>丁</sup>ま  
 った堆の南<sup>戊</sup>石地藏菩薩の<sup>己</sup>近<sup>庚</sup>ふ  
 在<sup>辛</sup>む<sup>壬</sup>魚鷹<sup>癸</sup>、此水小<sup>甲</sup>押<sup>乙</sup>り<sup>丙</sup>  
 奥落<sup>丁</sup>る<sup>戊</sup>て<sup>己</sup>以<sup>庚</sup>て<sup>辛</sup>鳴鳩<sup>壬</sup>法<sup>癸</sup>の<sup>甲</sup>  
 存<sup>乙</sup>あり<sup>丙</sup>とも<sup>丁</sup>ま<sup>戊</sup>み<sup>己</sup>さ<sup>庚</sup>ご<sup>辛</sup>と<sup>壬</sup>り<sup>癸</sup>  
 丁<sup>甲</sup>女<sup>乙</sup>飲<sup>丙</sup>み<sup>丁</sup>初<sup>戊</sup>く<sup>己</sup>く<sup>庚</sup>く<sup>辛</sup>く<sup>壬</sup>く<sup>癸</sup>  
 し<sup>甲</sup>と<sup>乙</sup>び<sup>丙</sup>て<sup>丁</sup>美<sup>戊</sup>依<sup>己</sup>子<sup>庚</sup>法<sup>辛</sup>の<sup>壬</sup>  
 る<sup>甲</sup>ふ<sup>乙</sup>あ<sup>丙</sup>く<sup>丁</sup>も<sup>戊</sup>く<sup>己</sup>く<sup>庚</sup>く<sup>辛</sup>く<sup>壬</sup>く<sup>癸</sup>  
 女<sup>甲</sup>く<sup>乙</sup>く<sup>丙</sup>く<sup>丁</sup>く<sup>戊</sup>く<sup>己</sup>く<sup>庚</sup>く<sup>辛</sup>く<sup>壬</sup>く<sup>癸</sup>  
 汝<sup>甲</sup>く<sup>乙</sup>く<sup>丙</sup>く<sup>丁</sup>く<sup>戊</sup>く<sup>己</sup>く<sup>庚</sup>く<sup>辛</sup>く<sup>壬</sup>く<sup>癸</sup>  
 此<sup>甲</sup>く<sup>乙</sup>く<sup>丙</sup>く<sup>丁</sup>く<sup>戊</sup>く<sup>己</sup>く<sup>庚</sup>く<sup>辛</sup>く<sup>壬</sup>く<sup>癸</sup>  
 此<sup>甲</sup>く<sup>乙</sup>く<sup>丙</sup>く<sup>丁</sup>く<sup>戊</sup>く<sup>己</sup>く<sup>庚</sup>く<sup>辛</sup>く<sup>壬</sup>く<sup>癸</sup>  
 せ<sup>甲</sup>く<sup>乙</sup>く<sup>丙</sup>く<sup>丁</sup>く<sup>戊</sup>く<sup>己</sup>く<sup>庚</sup>く<sup>辛</sup>く<sup>壬</sup>く<sup>癸</sup>  
 せ<sup>甲</sup>く<sup>乙</sup>く<sup>丙</sup>く<sup>丁</sup>く<sup>戊</sup>く<sup>己</sup>く<sup>庚</sup>く<sup>辛</sup>く<sup>壬</sup>く<sup>癸</sup>



婦氣大堤邑



婦氣大堤邑

里長

小右衛門

此邑ハ婦氣と大堤と二郷一合せし村名ニ此多分ヒ多シ沼三箇処ニ在リその沼濇々子田窪沼其調大沼多分ヒ多シ小沼多分ヒ多シあり此沼水を以て八十斛ハ稲田を飼ふといひまゝ婦氣ハ沼田をハ稲けと云ふまゝ、沼を深池の釣りや古池の釣りや鉄砲をぬけ筒と云ふ火口の古ッあれるをハ湫々古池をいふ本あるハ尾張國ハ陶器天目多ク血焼あり此土あり池の底ニ在リてこゝより人の採らん事を別林と恒ハ水を湛しそこを巾沼といふ此處ハ田窪沼ありて沼と云ふまゝ池をいふ堤と云ふこゝありて堤と云ふはらゝんと多ク此國の人凡て池を堤といふ此大沼を大堤といひて弘大池の名ハ有ける



野中村一戸

此村寶永元年申年創りて民家三軒ありしより郡邑記に見えり

稻荷神社

祭日八月十八日

別當 齋西學寺

田舎なるれ名

牛頭戸

山本郡朴瀬枝村より  
同名牛頭戸あり

郷士館

ハッ口兵助の事

ハッ口兵助多そのむらゝ前郷村のハッ口三枚橋とて処ありて家  
之国守義宣公の市代より黒馬とて名馬を献りて新墾  
の功ありし事 公より證文にも見えたり今ハ大堤の兵助とて  
其後ありたり

徳民家三十二戸

人負百七十八

馬二十五疋

大堤是兵助家藏

馬石高を定よりて 神妙の外に新元  
より近出結つて事方より仍加増し内  
所全處其の旨に代りて新元  
陳をよりて免ふりたり

元和八年

戊八月

梅津村

ハッ口

兵助



野中村

此村實水元

稻荷神

一八八〇

一八八〇

一八八〇

一八八〇

一八八〇

一八八〇

一八八〇

一八八〇

一八八〇

安田村



安田村

安田邑

里長

利兵衛

此村横手の西南まゝ驛路往復に西の方あり享保郡邑記家  
負之軒日渡村家三軒と見ゆ此日渡邑天明三四年卯辰酉歲  
の飢饉より一に廢村なりと云

馬頭觀音音舎 祭日八月十九日 別當 大谷新町修驗 西學寺

田地字

日豆 トウモロコシ 八王子 谷多 向田 鉤栗澤 大代 多

柳塘 館平 馬場

此館をいつちり人の居館とも傳へありねど按ずると関根村の伊  
藤典五右衛門が十代先より安田邑に住居ありと云り興五右衛門  
が上祖ハ瀧口次官サ藤原季武より後三年の戦の時を將軍



義家朝臣大豆を貢せし家ありし其の館あり住

くらしもの馬場の跡ありき

此館にいたる人の名録ありしものあり

味敷 駒平 田新

日田 八王子 田新 田新 大六郎

徳氏家十二戸 田新 人負五十六人 馬七疋

田新 縣令 音念 田新 榮 八月 田新 田新

田新 縣令 音念 田新 榮 八月 田新 田新

田新 縣令 音念 田新 榮 八月 田新 田新

田新 縣令 音念 田新 榮 八月 田新 田新

安田 里長 田新

赤坂邑 里長 田新

此村境手の面三つありしものあり

六戸ありしものありしものあり

七戸ありしものありしものあり

八戸ありしものありしものあり

九戸ありしものありしものあり

十戸ありしものありしものあり

十一戸ありしものありしものあり

十二戸ありしものありしものあり

赤坂邑

本郡赤坂村氏家三戸



赤坂邑  
里長  
勘助

赤坂邑 里長 勘助

此村横手の西三十町あり家負享保のむろ、四十軒今三拾六戸あり枝郷城野園森崎柴崎伏山とあり

七ノ塚とありそ名藤原塚鎌田塚高橋塚高山塚佐藤塚

菅原塚池田塚とあり七ノ塚といふは、澤氏の浮浪者千家とあり

地うとありそ身を潜るゝ土民とあり上祖より千家の姓氏もあつた

せとて系図代衣千家名苗氏流ておのちくゝ形理とて塚せとあり

其末をあり佐藤勘助高橋茂左門藤原三郎兵衛菅原六兵衛

池田五兵衛鎌田喜三郎高山兵右衛門此七人の人なり

正一位稻荷大明神社大杉生より祭日八月廿九日 齋主 郷中

本郷赤坂村民家三十戸



本郷並村 城野岡村

城野岡を赤坂より西方に民家十三戸あり

大山祇社有りなりとて神酒祭ると云

其末の山に赤坂を越え山頂に神宮三所あり

本村の西北にありて民家三戸あり

赤崎村

赤崎の方よりありて赤崎崎より五助九兵衛二戸あり

伏山村

伏山を北よりありて民家四軒あり

愛宕社

西南に向ひ祭日六月廿日

別當本明院

白山社

南向ひ祭日四月廿日

齋主伏山御中

田地字

下三枚橋

郷士館

荷坂下

土井下

狐森

橋本

柳下

大沼村の南に在り耳三石間許

横手より赤坂邑に入りて碑あり小栗忠藏某書りといふ其石

高七尺許横三尺計二

世話人

赤坂村

佐藤勘助

昔思碑

横手赤坂之間田高道低當朔風

捲雪之時寒水没脛十年之間凍

死者九人里正為之建官丁丑築

道以便往還庚辰建以弔飢

前所村

嶋森和三郎



民家三十六戸

人負三百人

馬二十足

北山

坂下人里山崎之重下正祭

新堂之朝其水別野上之山

新堂之朝其水別野上之山

高ノ入持針三八本

大正八年四月五日

白山江崎

白山江崎

白山江崎

白山江崎

三本柳邑

里長

市重郎

三本柳邑

神朝宮



市重郎

せうし多岐三とれ柳をどれあじすきてい依君やみちのく  
 少もさね名あでとおねえり享保日記の家拾八軒今廿八戸あり

助太郎小屋村今家

助太郎小屋村享保日記に五軒と見ゆこれ某小屋某小屋とて  
いふ一軒とて子四十八小屋の内は残りつる名に

六郎小屋村家令

享保日記ハ六郎小屋村民家六軒と見ゆ  
之ち三つは子四  
ハ小屋の餘波と見え多り

八幡宮  
祭日八月十九日  
そのく北江八須田内記  
某斎神あり

神明宮  
祭日  
同月  
同日

齋主里正ちりとり







八幡宮

八幡邑

夜波

里長

新太郎

郡邑記云往古ヨリ正八幡宮有リ神領前郷村中物成内五石  
災神主高瀬安藝高受取成神祭民家十軒云々見えり

八幡宮祭日二月初卯日八月十五日

祠官

高瀬 貢重則  
高橋 友之進

いふ所の社地を今本宮とて杉二本生りもとをさかへし海へて  
にしちの形がらゆあるさうな傳ふに唯そ小野寺家  
代々修理を加へられしをいふ世に焼亡てその傳ふねど  
石燈の柱に其長四尺計りあるは正八幡宮文禄四年義道とあり  
を見し二百余年のむしをあらはれり

稻荷明神

齋主 新太郎

枝郷一々あり 石所村家今享保日記に民家九軒とあり



此村の東北の方を石切り高き丈斗幅四尺四方要石の如く其深さはよりもありと云つゝいづれ人とり集りて堀りありしか五六尺も堀れどあるその底知れずと云ふ止ありと云ふ此石あるをよて石町とて小野寺の時代の肆家の住家と云ふ事、荒所長者所の名田畠は残りてあり

○八澤木郷保呂羽山下居宮別當上祖遠藤九郎次郎勝親朝臣より十八代遠藤對馬正保明應年中油利忠八ト横手ノ小野寺合戦の時小野寺は屬し度々高名あり永正六年七月十八日横手石町一木次部ト同行して山嶽山塩湯彦ノ神社ヲ奉始仙北秋田六郡ヲ巡見ス天文二年癸巳七月十日行年九十歳ニ死スと家系譜に見ゆ事、此事古本秋田六郡順禮記にも見ゆ

村上源系圖

八幡村 新太郎家藏

○上祖守重村上衛士形部まゝ八郎右衛門と云ふ母ハ河村市右衛門ノ女ニ市當家義隆公ニ奉隨小勝郡小野村平鹿郡八柏村吉田村に於て百五拾石を領地トシ横手内前御小居住し後市當より依て久保田ニ移り朝日郎兵衛娘を娶り無男子一女あり故大越因幡三男を智養とせり康應二年三月廿日行年六十八歳ニ於久保田死去法名頂山龍門居士寺ハ元來横手大儀山正平寺也同三年三月廿日故守重頂山為回向横手菩提処正平寺ニ高五拾石を寄附一五倫塔を建立之妻ハ寛文元年七月四日行年七拾歳ニ横手於正平寺死去法名正法院心了大禪定尼

○守忠村上掃部新右衛門と云ふ母ハ朝日郎兵衛女ニ實大越因幡



二男智養子也明暦元年故有テ蒙中勘氣故身立處無之元来  
柳生流劍術達人ニテ諸国武者修行シ南部内川虎ニテ強盜  
七人出會一人を打倒二人を切付テ残四人を追散テ此勳ヲ顯  
名譽驚怖寛文七年五月南部信濃守利直公所望依テ南部  
森岡住居ス廿年目貞亨三年五月暇を申請テ南部より再々  
横手に住ス元禄元年正月二日行年六十三歳ニテ死去ス法名頂冠院  
興言明居士妻ハ寛文元年三月廿日行年三十歳ニテ横手於正平寺死  
去ス法名春光院妙了大姉

守隆村上民部八郎右衛門と子母ハ家女ハ八郎右衛門守重娘ハ馬  
栗名人メテ戸村公ハ抱アリテ上野臺ニ住ス元禄三年二月無禮  
有テ祿を召シ上ル水暇ニテ横手ノ鍛冶所ニ住居ノ柳生流兵

法家傳ノ弟子五十八斗指南ノ安樂ニ住シ元文元年辰月十七日行年  
五十歳死去法名徳照院ニ興言養安善居士元来禪宗ニテ大儀山  
正平寺ニ在リ処天和二年二月寺論ありシ依テ改宗ノ横手山九島寺  
西光院を菩提寺トシ妻ハ寛延三年壬申月十七日行年七十九歳ニ  
死去法名光ノ院弘興言妙壽清大姉 守清村上貞治ハ郎右  
衛門モ新右衛門と子母ハ松ノ寄家中佐藤七兵衛信宗女横手  
鍛冶所ニ居住ス年廿歳ニテ享寶五年六月八幡村肝煎役頼ル  
相勤メ後ハ八幡村ニ移リ延享丑年水懸リ山高三十石余ノ小カ堰と東  
横手町中へ通りノ堰メテ此堰大ニ挟リ水行キ不通シテ年々欠テ損シメ  
心痛ノ処此堰幅古来ノ通りニ相改メ水通シ三千餘石ノ田地へ自  
在メ水引取寛延元辰年草飼新代山東山ニ於テ仙北郡六ヶ村より



平鹿郡十三ヶ村ハ沙汰申懸ル凡そ論及ビ申換使役申再應ノ内  
吟味昂山境仕分ケ平鹿郡十三ヶ村の内高七千六百餘石内田地為助  
成右東山利運ハ一ツ為末代忠進ノ當村貧乏郷中一ツ村の相續  
なりト云々依テ申公儀ノ願段々申上ケ明和四亥年中改正申等  
申請ケ村方相續ナリ云々安永十丑年四月三日行年八十三歳死去法名  
成就院最興言晴壽居士妻ハ寛政二年戌八月朔日行年八十九歳  
死去法名魚量壽院祐興言妙如清大姉 守秀村上新三  
郎マヽ四郎兵衛ト云々母ハ久保田の家士助川弥兵衛信忠娘ノ実  
新藤柳田打照并弥左門ニ男ヲ養子トシテ元末岩城伊豫  
守秀隆公中嫡子次郎公中早世ニ依テ松平陸奥守吉村公中  
弟中養子ニ其時岩城家騒動ニ依テ我公生要人自害ノ故龜

田ヨリ浪人セリ照并弥左門ハ元より縁者トシテ依テ弥左門ノ二男トナリ  
村上智ト云々実ハ山石城左京亮隆泰公ノ浪人ト云々此妻ハ家の  
一女ニ共ニ父ノ心ヲなせり依テ別家ト云々然ル所照并弥左  
門ノ家内ハ引取度願ヒテ右別家残りなく弥左門方ハ引越  
一ノ九品寺西光院ナリ寺暇ニ申請ケ弥左門菩提寺大谷村光徳  
寺檀家ト云々依テ弥左門方ナリ又別家ト云々十年ノ新藤  
柳田村ニ住セリマヽ同村ニ住居シマヽ亦候村上新三門  
宇清方ヘメ一ツカレマヽ願ヒテハ家内残りなく引取新  
右由門方ナリ又別家ト云々一ツカレマヽ置テ依テ四郎兵衛寺ハ大  
谷村光徳寺ニ寛政元年酉十二月十六日死亡法名釋榮  
現 守家村上良助マヽ新右衛門ト云々母ハ久保田助川弥兵衛



信忠女之實ハ南部大膳大夫利視公の家士浪人より播磨嘉右衛門洲州大曲村より住ル本苗ハ赤松氏之先祖赤松次郎入道播摩國に住ル故此末葉より依テ赤松村上西家一族より依テ嘉右衛門二男を知耳養子と云則ハ幡村肝煎役を相勤メ寛政三年亥九月八日五十九歳ニ死去法名正覺院台譽天善居士  
宇諸村上石五郎八郎右衛門より新右衛門と云母ハ家ニ女あり十六歳よりハ幡村肝煎役を勤ム男子女子あり檜山多賀谷家士佐藤兵衛助二男を知耳養子と云享和元年酉十月杉目村ノ内野中ト申処ハ村々入會ル場処論地ニ成リ而換地關勘左門殿河部清至門殿遠山長七郎敏三人而出巾再應巾吟味ノ節地境仕分ケ組合村々十三ヶ村利運と云り末代迄の忠進ことり

宇廣村上新太郎母塚元七右衛門女此七右衛門祖父塚元因幡と云ハ松平陸奥守綱村公より佐寶永元年三月癸酉より依テ人の嫉を請テ故巾暇申上不可故逐電を横手ニ住ル依テ七右衛門ト三代あり寶ハ醍醐村佐藤兵部二男を知耳養子と云云と見エタリ







静町

静町邑

里長

権兵衛

静町を閑寂なる地と名附くる処と思ふべきなりあるは  
按み山野寺時世の町なりそこ清水ありあるむ此あり清水  
水をせり寒泉と方言を以て清水あるを辨ある清水が  
所といふ事を静町の字を作ある一享保郡邑記は民家十  
軒枝郷 畚小屋と載此邑今廃あり 北小屋家四戸某小屋某  
小屋とてむ一四十八小屋ありつり

神明宮

一萬度市板串を納めつり

祭日八月廿日

齋主

郷中諸家

村中家負十四戸

人負七十五人

馬十疋







上八丁邑

里長

八右衛門

上八町下八町と別村といふとむういふ八丁と一村なりといふ  
享保郡邑記より上八町惣名は唱り谷地中村家負八軒此村を八  
丁村と可唱也天神町村同壹軒今三上小屋村古三軒今五戸明永村  
古二軒今三戸水越村古二軒今も二戸森崎村古二軒今一戸赤川村  
古二軒今も一戸云々と見え多し此は谷地中邑の發村人家あり  
慶安の始より佐々木右馬之丞某とて舊家もあり此に其右  
馬之丞の後胤とて木八右衛門といふ今も里正是ことなり

谷地小屋村

谷地小屋某小屋某小屋とてそのむういふ八丁小屋あり事古記



稻荷明神社

癸卯九月九日

齋主 六右衛門

天神町村

菅神江

癸卯三月廿五日

齋主 市兵衛

むう八月廿五日の神事ありが中ごろ託宣ありて今をあら春祭  
といふなりといふ此神形を紫磨金を以て鑄奉る一寸八分の神像  
ありけるなりそのかみの菅大神の神形小野寺氏の祖藤原  
義實朝臣は鳥羽院より賜ふとられ神像あがり武運長久祈  
りの為小野寺時道の一社建立ありとつり其紫磨金の神影  
横手の土坊本所といふ所の須田忠右衛門某の家ありその其家の  
知行処なりかく地家は秘藏をもちて春祭やよひのそれの日ハ  
うねるば天神所の神殿よりうへより奉るとつりまどとらふ梅

松櫻は小杉も生ひ交りて神さびなり小野寺の時代は此あつた所  
なり賑ひし処とつりさうなりをもちて天神町の名あるに其世の天神  
の神官は松林多門藤原善明といひが小野寺家落城の後世を  
うもつものと思ひなり天神の神像も市兵衛神田の事もある家  
ありこれ事まで里正に憑き難髪深衣の身となり寛文のころ西  
哲言寺の九世祐西の弟子となり法名祐頼とて行ひしなり今在る善  
明寺の祖あり天神宮の由来は善明寺の本坊西哲言寺に残りけりし  
まう天神の社地堅七坪八間横四十五間竪二松林善明寺旧地十五間二  
拾間二今有る草庵のありは松林多門藤原善明の旧宅の跡とし  
て小野寺家より五右衛門の水田を神供料に寄附ありし事あるなり  
かの寺に古記録に委曲ありしなり



上小屋村

此村東に天神町西に下八町南に赤川北に上境、邑は中きり是も  
りの四十八戸の一ありといふ

明永村

此明永邑に上八丁の中ある村に下八丁もまゝ明永なりとて古一  
村なれば古の同名もありけるもの

水越村

むろし大沼のあり地は今伊四郎とて子人の家には西なる軒の下あ  
り古沼の跡とてありその沼ありしを以て水越とての名あり  
けむし

大日如來堂 祭日八月八日 齋主長作が内神とて子

森崎村

此森崎のむろし古沼あり

赤河村

赤川を村の名も川れ名もいと多し此邑は長作が一戸あり

鎌民家廿九戸

人負五十二人

馬廿三疋



上小室村

新屋敷村の南西下、八幡宮の南に、上小室の里に、

りの里、小室の一里といふ

新屋敷

新屋敷の北、上小室の中、ある村に、上小室の里に、

村に、上小室の里に、

水越

新屋敷の北、上小室の中、ある村に、上小室の里に、

水越

新屋敷の北、上小室の中、ある村に、上小室の里に、

大日如来堂、新屋敷の北、

上野村

里長 久木郎

上野を下境とす、上野の里長、上野の里長、

上野の里長、上野の里長、

上野の里長、上野の里長、

上野の里長、上野の里長、

上野の里長、上野の里長、

上野の里長、上野の里長、

上野の里長、上野の里長、

上野の里長、上野の里長、

上埤邑

上埤邑の里長、上埤邑の里長、



上野村

里長 久太郎

上境と下境は村多し子村名に境を坂合の義より近江山城の境は追分より是西世三ヶ国東世三箇國北堺といふを境とす下界の処もまた仙北郡境村のくよりある委曲も記し多し此上境は横手寄郷十八邑北郷に郡邑記は支郷甘邊村北東方川向に上境村田地有仙北金澤西根新田村内同郡飯泉村内山道に上境に人居三軒あり右支郷分り申す不知右下川原川手前南方甘邊村田地内へ金澤西根新田地形入組境に昔より人居ナレと見えし今、枝郷

上村

加美  
年良

上村家負古十戸今ハ十三戸あり東ハ杉目村西ハ館村南ハ大蔵



小屋北の甘邊村の中

白幡稻荷大明神社 祭日四月十日

齋主 三石工門二

馬頭觀世音ノ社

祭日四月七日

齋主 同家二

むく種子梵形彫碑を此地に掘り出で觀音と齋るといふ社  
二間四面 杉群の中は盛なり村民ニある尊敬り

館村

いりの城跡を存しむる館邑といれど其城主の名を某

と知れり人ありといふ家貞古世一軒今世一戸なり本太田上村といふ

処ありて家五戸ありしかその餘波なく退轉る今其後此村に存り東へ

河原田村西へ明田村南へ大藏小屋村北へ家無く河原二

神明宮ノ社

祭日六月十五日

齋主 市左門二

八幡宮社

祭日八月十五日

齋主 長右門二

大寛堂

此大寛堂本尊大日如來古作の十王の像あり圓仁大師の作といふ

人あり出羽陸奥はありて慈覺大師の作といふ佛多くある人の

ける日記に世は圓仁の作の佛といふ人多く偽作する慈覺大師

の弟子の作佛と多といふ圓仁の弟子は叡山の鶏頭院の安然といふ

童子教を作る知行なる法師ありその安然といふ作する

いふ大寛を削山などいふなり

専光寺

忠榮山専光寺に向ふ此寺いふに真言社僧なりかの密教

山の別當多しといふを云ひ傳ふ専光寺の傳ふ當寺則基某



人といふ事を志し依り本尊拜領の願主を開祖とせり應仁  
元丁亥四月七日釋玄智と有り二世智藏永正三年丙寅九月十五日  
遷化 三世玄魚永祿八年乙丑八月廿五日化 四世玄惠文祿二年  
癸巳十二月九日化 五世正智元和元年乙卯正月七日化 六世龍智  
寛永五年戊辰五月十六日化 七世玄了萬治三年庚子七月十五日化  
八世實玄延寶二年甲寅正月廿四日化 九世末智元祿八年  
乙亥四月七日化 十世方玄正徳二年壬辰九月十日化 十一世智顯  
寶曆二年壬申十二月十二日化 十二世智周寶曆四年甲戌九  
月廿五日化 十三世智傳文化三年乙亥十二月十三日化 十四世智采  
文政六年癸未十二月七日化 十五世現住西本願寺末弘専光寺覺  
音といひ

間明田村

此邑古拾軒今土戸あり東に館村西に堰合郷南に大藏小屋北に川  
原代といふ此地に間明山専光寺といふ真言宗派の寺あり其  
本上八丁に在る菅大臣の社はつらつらつり社僧ありともつり  
其寺を横手といひて東本願寺の末流を間明山西専光  
といふなり有るに 保長山京久太郎の家有り中渡野の時より  
むろしれ事なるを 通霄院殿義真公 通通院殿義敷公  
天樹院殿義和公 此の三代の君つとも万々やう毎の山名あり  
家におりむ中宿ありとも此宿に中宿ともありける  
中よりつれをむむむ 鑑照院公大江戸におまはしけるとも  
徳雲院公より文書ありその書は







民家古二軒今三戸あり東ハ三原西大藏小屋南ハ番小屋北ハ甘  
邊中ハ杉目と子村の堺に在ル村名トシ呼ぶと見えたり

### 河原田村

○享保日記ハ家貞三軒今もまゝ三戸あり此村東ハ杉目の野  
中西館村南ハ番小屋北ハ甘邊中ハ杉目

### 甘邊村

○此安麻閉村の事ハ前ハも記し古民<sup>モト</sup>三軒今一戸あり東ハ野中  
西館村南ハ番小屋北ハ仙北郡安本村ニ考ヘおまハ後三年の  
戦ひのと記伏兵あり此甘邊のありありむり今も河の邊ハ  
くいと廣くその世々木々ぬく生ひ立四方くく今の大鳥居山  
の邊ハ官軍にありて見給ひけむり前太平記世々卷雲上れ

馬の事とくくりまづば見えりまゝ奥州後三年記繪巻  
物調書ハ將軍のゆきすまは金澤の柵よりばきぬ雲霞れ  
こくめて野山をかくせり一行の旅馬の雲の上にとるあり馬陣  
くちまきやぬく四方ハ散りて飛ぶ將軍はるふ是を見くあや  
と驚て兵をく野邊にぬきむ柵の如敷の中より三千騎の兵を  
尋ひ得りこれ武衝がかりおけるに將軍れつとものこれを射ふ  
かきをついて得りぬ義家朝臣先年宇治殿へまゐりて負任  
をせめ事あや申けるを江師匡房卿多ち聞て器量武士の合  
戦の道をあやぬきと獨ち給けるを義家の郎等聞てまゝ主  
をどれ兵をけりきとふ弱かと思ひつ義家はこのやうに  
する義家これを聞てさる事もあると江師の出るける家



よるることさらし會釋しば其後彼郷よりひてふをよみけり  
義家ありき文の道をもつたふをいふ武衛のまめやあふれ  
まゝとぞいひけり兵の野あゆまを記を傳つるをやふといふ事  
待るとかや云々と見えたり此辭のあらぬとふたふあふま  
た前太平記の世に行の刻本とて大同の異せり此画に飛彈守隼  
の筆ありといふを見ゆ此廿邊とそいふのそれとあらぬめ

### 田地字

くげむ

やうつまぢ

りうまぢ

中屋

石田

菅生

田城

太田

十五田

此田より中古十五の本像を堀り出

し物語あり太田の内といふ

### 上境邑脱漏 古城圖並由來

○此古圖は横手格鳳山西誓寺

藏し所藏古圖古記に其凡を記す

柵は眞壁對馬某居城に城南向き大手の堀跡を今在る専光寺

西向の方々在る苗代田是に城の内よりあり是を構の井といふその跡を吉兵

衛といふ家の庭に本郭は西の方々に九に本丸の東北隅に高櫓の跡

高築て臺をありてあり元禄の頃臺をこわち堀りたひけり

其地は大神宮を齋奉なりその神は左の方より大松より小野寺時

世の松よりと子城の外堀を桐木屋敷を廻り西の方より苗代とあり

に桐木屋敷はむくし西誓寺のより跡にさうすを以て格鳳山の

号なりと云ふ本丸に九の間に堀ありそより八幡宮の壁より小野寺の氏

神といふ大杉生るそより九の内より右門といふ所の住居より小野寺







總家數

八十戸

人貧

三百四十一人

馬數

四十五